

海外コンペ参戦記

大沼幸雄

5月と6月に、続けてルクセンブルグと米国ミルウォーキーの国内展のコンペに参加しました。作品は、昨年の〈J A P E X ' 04〉で金賞受賞の荣誉に浴した「L. v. ベートーヴェン—その生涯と時代背景」（3フレーム）に、その都度手を加えたもの（4フレーム）です。結果は、いずれも金銀賞でしたが、この2回の評点が、77点から82点へと上がり、改良の方向性も明確になり満足すべきものでした。来年は、初の国際展「ワシントン2006」にチャレンジできればと願っています。

1) ルクセンブルグ EXPHIMO展 (5月14-17日：於モンドルフ・ル・バン)

(Exphimo Website:
<http://webplaza.pt.lu/public/rthill/philcolux.htm>)



モンドルフは、ルクセンブルグ市から車で20分位の温泉町で、ここでは毎年テーマを変えてテーマティクのコペが開催されています。国内展とはいえ、審査員構成やEUからの参加が多いことからみても実質的には国際展といえます。今年「音楽」がテーマであり、音楽切手のオスカーと言われる「アウグスト・マッサーリ賞」のコンペが同時開催されたこと、ドイツ郵趣協会の音楽切手グループの総会も開かれたこと等が重なり、欧州コンペ初見参には絶好の機会でした。出展作品は32点、そのうち音楽テーマは約90%の27点でした。参加者は、ドイツ、イタリア、フランス、ベルギー、ルクセンブルグ、スイス、オランダ、欧州外ではイスラエルと国際色豊かなものです。日本からの参加は初めてということで、開会式における町長のスピーチ、地方紙でも取り上げられ非常に暖かい歓迎を受けました。受賞者は、金賞4名、大金銀賞3名、金銀賞4名、大銀賞4名、銀賞3名、銀銅賞1名、銅賞1名でした。ベートーヴェンをテーマとした作品が3点激突したのですが、結局、その一名スイス人のトルナル氏が優勝し、金賞および「アウグスト・マッサーリ賞」を獲得しました。小生は、金銀賞の賞状と副賞にルクセンブルグ紹介写真集を頂きました。

モンドルフは、ルクセンブルグ市から車で20分位の温泉町で、ここでは毎年テーマを変えてテーマティクのコペが開催されています。国内展とはいえ、審査員構成やEUからの参加が多いことからみても実質的には国際展といえます。今年「音楽」がテーマであり、音楽切手のオスカーと言われる「アウグスト・マッサーリ賞」のコンペが同時開催されたこと、ドイツ郵趣協会の音楽切手グループの総会も開かれたこと等が重なり、欧州コンペ初見参には絶好の機会でした。出展作品は32点、そのうち音楽テーマは約90%の27点でした。参加者は、ドイツ、イタリア、フランス、ベルギー、ルクセンブルグ、スイス、オランダ、欧州外ではイスラエルと国際色豊かなものです。日本からの参加は初めてということで、開会式における町長のスピーチ、地方紙でも取り上げられ非常に暖かい歓迎を受けました。受賞者は、金賞4名、大金銀賞3名、金銀賞4名、大銀賞4名、銀賞3名、銀銅賞1名、銅賞1名でした。ベートーヴェンをテーマとした作品が3点激突したのですが、結局、その一名スイス人のトルナル氏が優勝し、金賞および「アウグスト・マッサーリ賞」を獲得しました。小生は、金銀賞の賞状と副賞にルクセンブルグ紹介写真集を頂きました。



ミルウォーキー・アート・ミュージアムにて

審査員から頂いたコメントを下記しますが、いずれも納得性のあるものでした。

(1) マテリアルについては、各国の郵政当局が公式に発行あるいは使用したものに厳しく限定すること。例えば、F D C、マキシマム・カードもあまり歓迎しない。ベートーヴェンを始めて英国に紹介したガーディナーの自筆の手紙(1841年)などは、厳密には、ただの古文書に過ぎないとのこと。(但し、珍品なので減点せず)

(2) 全般に切手が多すぎてマテリアルのバリエティが少ない。(もっと消印等中心に様々なマテリアルを沢山用いるべき) 欧州では、記念印の収集が大変盛んとの印象です。

(3) リーフは、詰め込みすぎは禁物ですが、空間が空きすぎるのも良くない。要はバランス感が大切とのこと。例えば、小生は、各章の区切りに肖像入りのステーションナリー一枚のみを用いましたが、これはスペースの有効利用という観点から好ましくないとのこと。

さらに優勝作品のベートーヴェン(8リーフ)に比べると、小生の作品は、4リーフと半分に過ぎず、マテリアルの種類、希少性(必ずしも高価格を意味しない)で遥かに貧弱なこと、ついでベートーヴェン研究においても更なる深みが要ると痛感しました。驚いたのは、誰もが1~2のテーマを長年追いかけて改良に改良を重ねているそうで、トルナルさんはベートーヴェンだけ20年も追いかけているそうです。

各国代表と歓談：左からシモン氏(仏)、ブラック氏(ベルギー)、ジェノヴェーゼ氏(伊)





ドイツ音楽切手グループ代表ペーター・ラング氏と共に

ドイツ音楽切手グループ代表のラングさん、同イタリア代表のジェノヴェーゼさん、フランスの音楽・ダンス・グループのシモンさんなど日ごろお名前だけはお馴染みの方に会えたのは幸いでした。ベルギーのブラックさんは、「鳥」の専門ですが、今回はそこからは派生した「小鳥の歌」をテーマに見事金賞を受賞しました。同氏は、ベルギーのテーマティックの代表で、2007年には、アウグスト・マッサーリ賞記念コンペのベルギー開催を企画しているそうです。ラングさんはコンピューター技師でシーメンス勤務、シモンさんはブザンソンに住み「オザフは、このコンクールで優勝して世界に羽ばたく機会を得た」言い、ジェノヴェーゼさんは娘さんが日本で美術を学んだそうで大の日本虫員であるなど、それぞれの人間的な側面が分かって楽しい機会でした。

何せ小さい温泉町なので、ホテルの朝食の時、昼間の町の散策、夜のレストランでも誰かと顔を合わせるなど親しくなるには絶好の機会でした。とりわけドイツ音楽切手グループは総会のあと、全員カジノでの夕食とダンスの会が開かれ、大いに盛り上がりました。各国の代表からは、ぜひとも日本との情報交換を強化したいとの要望があり、早速フランスには部会報、イタリアには、日本の音楽切手部会の活動状況を連絡しました。

ほどなく、フランスからは交換に先方の部会報、イタリアからは日本の音楽部会活動を詳しく報じた会報 "IL PODIO" を送ってきたのでビックリしました。今後、国際交流の重要性を痛感した次第

NTSS会場のディラールブースの光景



II) 米NTSS (全国トピカル切手展) (6月17-19日 於ミルウオーキー)

(NTSS Website:

<http://www.americantopicalassn.org/NTSS/ntss2005/ntss2005.htm>



5月の欧州に続き6月は米国への転戦です。米国にはAPS (全米郵趣協会) という大組織があるようですが、そこから派生したトピカルあるいはテーマティックに特化したATA (全国トピカル協会) 主催の国内展への出展です。毎年場所を変えて開催されていますが、今年はミシガン湖の畔のATA生誕の地ミルウオーキーが舞台でした。会場は、空港近辺のシェラトン・ホテルで、参加者は、全米から空港に集まり、そこから各地に戻るといいうかにもアメリカ的な会場の選定でした。50数年前にATAを創設したフサック氏も杖についてはありましたが、まだご健在で参加しておられま

さて作品ですが、ルクセンブルグは、異例の1フレームあたり15リーフ (5列3段) であったので、1フレームあたり16リーフ (4列4段) への再構成が必要でした。さらに欧州の審査員の意見を出来る限り取り入れるため、定量分析を行い、リーフあたりのマテリアル点数を4.03から4.36に増やし、リーフあたりの切手数を2.60から2.23に減らし、切手比率を64%から51%まで下げました。要は、リーフあたりのマテリアルの密度を上げると共に、切手以外のマテリアルを用いてバラエティをつけたということです。その間、日本郵趣協会の内藤審査員の貴重なご意見も頂戴しました。2週間強で大幅な見直しをするため大苦戦でしたが、出発直前まで、入念に手直しをしてぎりぎり完成しました。かなりの自信作でしたが、流石に本場はそんな甘いものではなく、すでに述べた金銀賞でした。ただし、点数が82点で5点改善したこと、7段階評価の欧州なら大金銀賞相当 {NTSSの表彰は5段階評価で、大金銀賞 (80-84点)、大銀賞がない} であったことを考えると、まずまずの成果というべきかもしれません。

今回の総出品数は40点で、そのうちマルチ・フレーム・クラス (ワン・フレームに対し) の競争出品者は21名でした。入賞は、金賞5名、金銀賞4名、銀賞2名、銀銅賞1名、銅賞4名、参加証5名でした。テーマは、様々で金賞入賞者は「法律家 (コーパス・ジュリス)」「ベイユー絨毯」「人間とロバ」「オオカミ」「サンタクロース」で多彩でした。音楽関係は、他一名のみの参加で、テーマは「切手における音楽芸術とオペラ」で銀賞でした。

審査員のコメントですが、欧州とは若干のニュアンスの相違を感じました。

1) マテリアル自体については、殆ど問題点の指摘はありませんでした。ガーディナーの手紙については、「これはダイナマイトだ。実にすばらしいマテリアルです」と言うので「郵趣要素の観点からどうですか」と訊いたのに対し「まったく問題ない」と3人のジャッジが同意見であったのにビックリしました。欧州より許容範囲が広いとの印象です。年代順に忠実に並べたので、最下段の左端にきたのですが、「逸品は、二段目、あるいは三段目の中央に置くべき」と言うことで、厳密な年代順にこだわる必要はないとのこと。目玉商品は、審査員の目を意識して配列すべきとの助言でした。

2) マテリアルのバリエイティについては問題の指摘は一切ありませんでした。欧州の教訓を生かして、かなり手を入れたのが功を奏したのかもしれませんが。

3) スペース利用については、欧州と同じ指摘で、各章の区切りに葉書一枚のみを用いるのは、スベ

欧州ではまったく指摘の無かった点多々ありました。いずれも内容的なものではなく、展示技術が中心で、コンピューター駆使は必須との印象です。例えば、①マウントに黒色は避けるべき。枠は、淡い色調（ライトブルー、ライトグレー、ライトブラウン）で透明のマウントを用いるのが良い。喪中の黒枠（いわゆるMourning Cover）と間違えられるとか、黒枠に目が行きがちになるのが理由です。確か、他の上位展示品を見ると、黒枠使用は1点のみで、他は殆どが淡いカラーを用いており、これが流行との印象です。またこれぞと言う希少品には、濃い赤色とか緑色を用いて審査員の目を引く工夫もされていました。②プランの記述は細かすぎる。もっと大枠で括るべき。③最後に「結論」をつけて全体を締めるべき。④説明も、テーマチックな部分は、簡潔に分かりやすくすると共に、フィラテリックな部分は、文字サイズを一段下げてイタリック体を用いるなどの工夫がいる。⑤チーフ・ジャッジからは、「何よりもフレーム数が少ない」とずばり言われました。今回の金賞受賞者は、9フレーム1名、8フレーム3名、5フレーム1名で、たしかに4フレームでは見劣りがしました。審査員の採点表の最初のコメントに「大型作品へのすばらしいスタート」とあったのは、激励であると共に、「この程度のフレーム数ではいけません」との警告でもあったと思います。

今回のコンペと合わせて、ATA会員の総会が開催されました。それだけにミルウォーキー市内観光コース、会長主催ディナーパーティー（ローカルのビール会社の見学を兼ねてピア・ホールで開催）、表彰ディナーパーティーなど社交の場も多くあり、知り合いの輪が広がったのは収穫でした。



ニューヨーク時代の旧友グジオさんに20年ぶりの再会も果たしました。彼は、今は、国際審査員をリタイアした最長老ですが、当時は、音楽切手グループの月一回の会合のレギュラーで、伝統ある「コレクターズ・クラブ」等で談論風発をしていた仲間の一人です。カナダのサスカチエワン州のモーツァルト村の発見者で、駅馬車時代の開拓史まで遡りモーツァルト局の詳しい歴史について論文を発表したことで知られています。したがって音楽切手収集家なら一度は名前を耳にした方もおられると思います。モーツァルト郵便局のリフォームのときに古い什器備品をそっくり払い下げてもらいブルックリンの自宅に旧郵便局内部を再現したツツモノです。一度見せて頂いたことがあるので、今回、「まだありますか？」お尋ねしたら「まだそのままあるよ」との事でした。

その他、今回の収穫は、8回にわたり開催されたセミナーでした。「テーマチック収集入門」「上級テーマチック収集」「テーマチック展示方法」「上級トピカル展示」「ATAトピカルおよびテーマチックの審査方法」「ワンフレームとオープン展の展示方法」と言ったテーマでしたが、実に、勉強になりました。今回「法律家」のテーマで優勝したフラッシュ氏（弁護士）も講師をしましたが、「見せる相手は誰か？それは審査員のみである」と言われ、漠然とは考えていましたが明確には意識してなかっただけにギクリとしました。「審査員の一人が言ったコメントを鵜呑みにする必要はない。二人が同じ事を言ったら真剣に考えたほうが良い」と言うのも審査員のヒューマンな側面（価値観、好み）を衝いていて面白いと思いました。「審査員は1リーフに6秒しか割けない」「優勝者の作品の良い点は、どんどん盗んでまねろ」なども名言です。とても率直で歯に衣を着せない実戦論で感銘を受けました。

米国にはA A P E（全米郵趣展示者協会）と呼ばれる組織があり、会員は、出展物につきリーフごとに審査のプロから直すべき点につき事前にコメントが無料で受けられます。（会費は、年間25ドル）参加者に尋ねたところ、殆どは、このサービスを受けておりあたかも「それは常識」というスタンスなので驚きました。

最後に、ぜひATAへの入会をお勧めします。私は10年以上前から会員です。年会費30ドルですが、年6回の会報、ハンドブック、チェックリスト・サービス（現在約450テーマ）等があり、とても役立ちます。メーサーATA会長の話では、チェックリストは、非常に需要が多いので会員獲得の強力な武器になっていることでした。またATA出版の小冊子「トピカル・スタンプ収集のアドベンチャー」（著者：フサック氏とグリフィンハーゲン氏共著）など参考にある出版物も多々あります。ATAには日本人会員も40名強いるそうです。関心のある方はご連絡いただければ、連絡の労を取ります。

（2005. 7. 7. 記）

グジオ氏とマリアン・オーエン女史（講師）と共に（受賞パーティーにて）